

「満洲国」文学についての調査成果報告

文化科学研究科・国際日本研究専攻 梅定 娥

「満洲国」文学についての調査成果報告

文化科学研究科・国際日本研究専攻 梅定 娥

皆さんこんにちは。国際日本専攻の梅定娥と申します。今年の5月末から6月のはじめまで北京へ資料調査に行ってきました。ここではその成果を報告させていただきます。

まず私の博士論文のテーマと方向について簡単にご紹介します。

テーマは「満洲国」文学研究——古丁を中心に——です。なぜ「満洲国」なのか？ここでは詳しく説明できませんが、ただ15年しか存在していなかった傀儡国家「満洲国」は戦後北東アジアないし世界に影響を与えつづけています。今「満洲国」の政治、経済などについてたくさんの研究成果が収められています。ところが、文化面についての研究はもっと力を入れなければならないと思われま

す。日本と中国の間は何千年も続き文化交流を行ってきましたが、「満洲国」のような限られた地域空間の中で日中文化の正面衝突がなされたことはありませんでした。日本は圧倒的な力を持って満洲に臨み、そこでいわゆる「満洲国文化」を創ろうとしていました。それに対して地元の「満人」（その時代その中国人が満人と呼ばれていましたが）たちはどのように反応したのでしょうか？彼たちは日本の言い方ややり方のどこを受け入れたのでしょうか？またはどこに反発したのでしょうか？これらの問題が明らかになれば、これからの北東アジアの地域ワーク作りや文化交流にも役に立つのではないかと考えられます。

私はこれらの問題を究明しようとするならば、「満人」作家古丁のような人物が無視できないと思います。なぜならば、北京大学卒業の古丁は左翼作家連盟のメンバーでもあり、当時中国で時代最先端に立つ若い知識人ともいえます。また、彼は日本語の達者で、当時「満洲国」政治実権を握っていたといわれる国務院で統計処の事務官として働いていました。日本文化を理解し、日本文学を吸収しようとしていました。また、太平洋戦争に入ってから、彼は1941年7月27日に設立された満洲芸文家協会など「満洲国」戦時文芸団体の幹部ともなり、三回にわたる大東亜文学者大会にも参加しました。彼は日本と中国両方をまたがり、さまざまな面から力を受け、その力の作用で動いていたと考えられます。だから、彼の言動が複雑そうにみえ、彼に対する評価がなかなか一致しないのは現状です。

作家古丁およびそのグループは文学創作をしながら、「満人」の文学力を高めるために、日本文学などを翻訳紹介もしていました、また、当時の満人民衆の文化レベルを高めるために、古丁は「満洲国」の国務院の仕事をやめ、出版事業に転じました。つまり彼の行動は大まかに文学創作活動、翻訳活動、出版活動と分けられます。彼を研究するには、この三つの活動を明らかにしなければなりません。

創作活動の面では、随筆やエッセイを含め彼はたくさんの作品を書きました。翻訳活動の面では、彼及び彼が主導しているグループが活発な翻訳活動を行っていました。また、出版活動について、彼が携わった雑誌『明明』と『芸文志』、それから彼が建てた出版社兼本屋の芸文書房があります。これらのことについてのすべての資料を集めなければ古丁の全体像が浮かんでこないと考えられます。

これらの資料には、日本語のものは日本で探せば出てくる可能性があります。中国語のものは中国で収集しなければなりません。これは実はかなり難しいことです。なぜかといいますと、「満洲国」は中国人にとって屈辱なもので、崩壊後その資料を保存しようとする人が余りいませんでした。またその後いろいろな原因もあって、当時の資料がばらばらになってしまい、どこに何があるのかわからない状

態になってしまいました。このようなことがあって、私は博士論文を完成できるかどうかは、資料収集の時間と資金があるかどうかにかかっています。特に資金の面が難しいのです。そこにイニシアティブ事業があって本当にありがたく思っています。

今度北京での資料調査は前もって中国国家図書館のホームページを調べて、それによって資料のリストを作りました。ところが、いざ図書館に行きますと、この本もあの本もないといわれました。なぜかと聞いたら、ホームページのデータはほかのいくつかの図書館と一緒にずいぶん前から作ったもので、そこに乗っているデータの実物がこの図書館に必ずしもあるわけでもないという説明を受けました。ちょっとがっかりしました。

それに、私が扱っている資料は1950年代以前のもので、本の保存のため、一切コピーしてられません。ただ図書館側に頼めばデジタルカメラの撮影をしてくれます。その分、撮影費用はコピー代よりずいぶん高くなります。一元の人民元を16円と換算すれば、コピー代一枚は8円ですが、撮影一枚は32円、112円、160円というようになります。撮影代のほかにサービス料が必要なところもあります。

またこの資料の中に、ほかにどこにもなく、一冊しか残っていないものが多いです。そのような本は大変貴重なもので、文物扱いしているところもあります。文物ですからその大切さによってランクが決められ、それによって撮影の契約書を結んだりするなど取り扱いが違います。

これらの写真は今度見つけたものです。この『芸文志』は古丁たちが出版した文学雑誌ですが、これは同人雑誌で、これは満洲芸文聯盟の中国語機関誌です。

これは古丁訳夏目漱石の『心』です。これは幻の本だったので見つけて非常に嬉しかったのですが、内容の三分の一しか撮影してできませんでした。

これらは当時出版された小説や詩集です。みんな貴重なものばかりです。これは古丁グループが翻訳したもので、この現代日本文学選集は全部7巻もありますが、ほかの6巻はどこにあるのかまだわかりません。このシリーズは満洲文芸家協会が推薦して翻訳されたもので、古丁たち自ら選んで翻訳したものとは違うように見えます。その違いはいったいどこにあるのか、全部の翻訳作品をそろえない限り、断言しにくいのではないと思われます。



(写真左：夏目漱石著古丁訳『心』 中：同人誌『芸文志』 右：満洲芸文聯盟機関誌『芸文志』)

またこれは「満洲国」の出版物ではありませんが、「満洲国」の研究にも役に立つものと思われます。東京で開催された第二回大東亜文学者大会で古丁たちが、大東亜内部の文化交流のために編訳館の設立を提言していました。「満洲国」ではその編訳館がとうとう設立されませんでした。北京では作られ、またこのような刊行物も出されていました。この中に島崎藤村の『夜明け前』の翻訳連載があります。この『日本研究』も北京で出版されたものですが、当時の中国人はどのように日本を研究していたのか、これを読めばわかるかもしれません。残念ながら、調査経費を気になって、この本の内容は撮影してもらいませんでした。

以上これらの資料は今回の調査の成果でかなりの収穫と思われませんが、博士論文の完成までにはまだまだたくさんの資料が必要です。例えば、先お見せした雑誌『明明』と『芸文志』はまだそろっていませんし、翻訳ものやほかのいろいろな資料の発見もされていません。博士論文を完成するまでに、何回も繰り返し調査しなければならないと覚悟しています。特に「満洲国」の地元中国の東北地方に行かなければならないのです。あそこはずいぶん寒いところですが、できればこの秋にでも行きたいと思っています。以上です。どうもありがとうございました。